（様式１）

# 令和５・６・７年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
# 学校改善プラン（１年次）【小学校】

【学校名等】

| 学校名 | 綾部市立綾部小学校 | | | | | | | 校長名 | 小嶋　康弘 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学　年 | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 | 特別支援 | 児童数 | 511 名 |
| 学級数 | ３ | ３ | ３ | ３ | ２ | ３ | ４ | | |
| 事業担当教員名 | 福井　陽介 | | | | | | | | |

| | |
|---|---|
| ① 中学校区で目指す子ども像 | ブロック教育目標：自立と貢献～夢をもち　仲間とともに　未来を切り拓く　子どもの育成～<br>ブロックの目指す子ども像：夢をもち　仲間とともに　未来を切り拓く　綾中ブロックの子<br>夢をもち　（将来を見据え、主体的に学び表現する子）　【展望する力】<br>仲間とともに　（豊かな心をもち、自他ともに大切にできる子）　【つながる力】<br>**未来を切り拓く　（心身ともに健康で、実践力と行動力のある子）　【挑戦する力】**<br>綾中ブロックの子　（誇りと郷土愛をもち、地域とかかわる子）　【貢献する力】<br><br>・　認知能力、非認知能力、メタ認知をバランスよく伸ばしている。<br>・　自身の学習を自分で準備、実行、完了することのできる力と意思を持ち、自律的な学びを実現することができる。<br>・　課題解決的に学び、課題に対して意欲を持って取り組むことができる。<br>・　自分の弱みを見せて、本音で語り合うことができる。<br>・　下級生のモデルとして自身の姿を振り返り、上級生をモデルとしてよりよい生き方を考え、行動できる。<br>・　自分たちの学びや行動が身近な人や社会を変えることができるという自己有用感に裏付けられた自尊感情が育っている。<br>・　自己の理解を深め、夢や希望を持って、将来の生き方や生活を考え、自ら学習に向かうことができる。 |
| ② 目指す子ども像 | ・　書いたことの音読から、メモだけでの発表、即興的な対話へとレベルアップできる。<br>・　課題解決の場面で、理由や根拠を明らかにして自分の思いを語ることができる。<br>・　低学年から積み上げてきた伝え方、語彙などを生かして、特別活動の場面で、相手意識のある伝え方で自分の考えを表現することができる。<br>・　自分自身のことをメタ認知的に捉えることができる。<br>・　相手の思いをしっかり聞くことができる。<br>・　比較、分類しながら、折り合いをつけた話し合いを行う。<br>・　単元のゴールに向けて、自分たちでどう迫るかを考えることができる。 |
| ③ 目指す子ども像に対する現状と課題 | ・　学習習慣が確立していない児童も多いため、授業外の時間を活用して支援している。しかし、基礎学力の定着にも弱さが見られる。<br>・　児童数 500 人以上の中規模校のため、誰かが行動するのを待つ姿勢が強く、失敗することに抵抗感があるため、積極的に挑戦することが難しい。<br>・　学習の方略を身に付けている児童が少なく、授業の中で単元の学習計画を立てたり、自主学習で自身の学びを深める方法を考えたりするのが難しい。<br>・　自分の思いを語る前の段階として、自分の考えを持てない児童や友達の考えを真似することもできずに、思考が止まってしまう児童もいる。<br>・　単語のみで表現したり、相手が察してくれるだろうという言い方をしたりして、論理的ではない伝え方になっており、相手意識が低い。<br>・　自分の行動や思考を振り返る力が弱く、同じ問題を繰り返し間違えたり、友達とトラブルになったりする。<br>・　自分の話は聞いてほしいが、相手の話をじっくり聞くことができない。<br>・　話し合いの中で折り合いをつける経験が乏しく、自分の意見が勝つか負けるかの二者択一になりやすいため、よりよい考えを生み出す話し合いにはなりづらい。 |

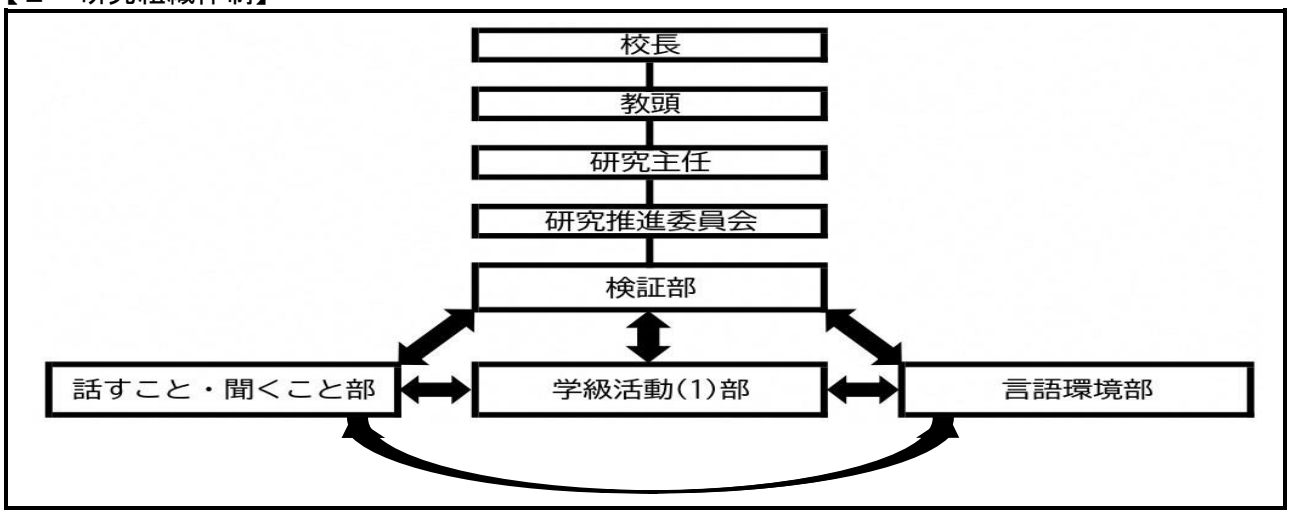
| | |
|---|---|
| ④　目指す子ども像に達するための仮説 | ・　論理的に考える力や表現したり伝えたりする力が高まれば、人間関係のトラブルが減ったり、集団としての学びが深まったり高まったりするのではないか。<br>・　国語科を中心として言語力の育成を図ることで、論理的に話したり、書いたりすることで自分の思いを伝えたり、相手の考えを理解したり、文章を読み取ったりできるようになるのではないか。<br>・　話す必然性、聞く必然性のある題材を創造すれば、相手意識を持った話し合いや対話が生まれてくるのではないか。<br>・　学級活動（１）を中心に、教科・領域で学んだ内容を生かした話し合いを行えば、折り合いを付けながら集団としてより良い意見を作ることができるのではないか。<br>・　振り返りの時間を大切にするとともに、観点を示したり、添削したりすることで、メタ認知の能力が高まるのではないか。<br>・　教科・領域だけでなく、家庭学習も含め、学習方略を指導することで、自律的に学ぶ児童に育っていくのではないか。 |

令和６年３月６日現在

【１　研究主題】

言語活動の充実と論理的思考力の育成
～筋道を立てて考え、生き生きと自分の思いが語れる児童を目指して～

【２　研究組織体制】




【３　具体的な取組内容】

・　国語科「話すこと・聞くこと」領域において、児童にとっての魅力的な題材設定や言語活動を意識した単元構想の在り方について授業研究会を実施し、検証していく。
・　国語科で学んだ「話すこと・聞くこと」を生かした学級活動（１）の話し合いを計画的に実施していくことで、話し合って解決することの方法や折り合いをつける価値について感じられるようにする。
・　論理エンジンスパイラルを活用する論理タイムを設定し、言語についての学習を１～６年まで継続することで、系統的な指導を行う。
・　校内の掲示を定期的に変更しながら言語環境を充実させることで、場に応じた相応しい言葉の使い方を身に付けさせる。
・　１月 24 日(水)に研究発表会を実施し、研究の方向性や児童の育ちについて客観的に評価をしてもらう機会を作る。
・　学びのパスポートの質問紙以外にも、研究の成果や課題を明確にするために、評価のルーブリックを作成したり、学力層別に見られる特徴を分析したり、論理力を測るためのテストを作成したりする。

【４ 仮説及び成果を検証するための質問項目】

| 学年 | 質問番号 | 質問項目 | 概念 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 4～6 | 30 | 自分の考えた道すじをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。 | 自己調整 | |
| | 31 | わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。 | | |
| | 32 | 課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。 | | |
| | 33 | 目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。 | | |

＊５・６の分析の項目は削除しています。

【７ 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

・ テストなど、見直しや解き直しの方法を丁寧に伝える。問題文を読み直す、正解・不正解に限らず解いたプロセスの説明をさせる、類似問題を用意するなど、間違いをそのままにしないようにする。
・ 課題が残ったものに関しては、隙間時間を活用してやり切ることができるように、担任外を中心に学習をサポートできる場を設定し、個別に声掛けを行う。学習をやり切ろうとする過程を認め、少しでも主体的に学びに向かう力を高める。
・ 下学年の学習に課題が残る部分については、習熟度に合わせた個別の課題を用意したり、家庭と連携して課題をやり切ったりするようにする。

集団としての具体的な指導・支援方法

・ 学習をまとめ直すという経験が少ないため、国語や算数だけでなく、社会や理科、総合的な学習の時間などでパフォーマンス課題としてレポートを書く機会を作る。また、それを交流する中でまとめ方を知り、自主学習などもノートの書き写しではなく、まとめ直すことができるようにしていく。
・ 学習の際のグループの設定において、心理的安全性を意識しつつも、学力面でフォローできるメンバーを意図的に配置し、教え合い、学び合いができるようにする。特に、文章の推敲を行う際には、グループの中で適切にアドバイスができるように、観点を示す。
・ 授業の中で自己決定をして取り組む場面を設定する。算数や国語の習熟を行う際、学習課題を複数用意し、児童自身が選択して、学びをデザインできるようにする。
・ チャレンジ問題のような難易度の高い問題も用意し、分からない問題に出合った時にどのように学びを進めると良いのかを学ばせる。
・ 学びを深めていくために、自分の思いを伝える機会を用意する。そのために、ペア、グループ、全体など、教師の話す場面を減らし、児童の話す場面を増やす授業づくりを行う。
・ 友達と意見交流を行う学習では、友達の意見を書く場所をワークシートに作ったり、振り返りの中で自分の考えがどのように変容したかを書かせたりして、自分の考えを多様な視点から見つめ直す機会を作る。

【８ 仮説の修正】

・ 教科・領域だけでなく、家庭学習も含め、学習方略を指導することで、自律的に学ぶ児童に育っていくのではないか。
→ 学習方略という大まかな表記では、学校全体としてどのように取り組めばよいかが共有できないため、具体的に指導内容を明記する。【非認知能力】の自己調整を高めることを意識し、【学習方法】の体制化・精緻化に記載されている、振り返りやレポートで学習をまとめ直したり、多様なツールを使って情報を収集・整理したりする学習活動を充実させることで、自律的に学ぶ児童が育っていくのではないか。
・ 分析内容、授業改善の視点を共有し、学年ごとに意識して取り組む内容を焦点化すれば、学年の実態に応じた支援ができるのではないか。

【９　具体的な取組内容の修正】

・　社会や理科、総合的な学習の時間など、学習してきたことを児童自身がまとめるようなレポートやパフォーマンス課題を設定する。作成する際には、教科書以外の多様なツールを使って調べた内容を盛り込むようにする。また、学習内容をまとめる経験を生かして、家庭学習の自主学習の方法についても自分なりにまとめていけるような指導を行う。
・　校内で授業改善の視点を共有し、学年ごとに中心的に取り組むことを明らかにする。その取組や散布図なども意識しながら授業研究会を実施することで、児童の変容を捉え、成果や課題の分析を行う。

【10　児童の変容（普段の様子から）】

・　学習課題が残っている児童は、自ら学ぶ場に来ることを選び、担任外の教員の支援を受けながらやり切ろうとする姿が見られるようになってきた。また、学習課題がたまらないように、早め早めに行動する計画性が身に付いてきている児童もいる。
・　ペア・グループの人数やメンバーの構成を学級の実態に合わせて工夫することで、目標に向けて取り組む姿勢が高まってきた。
・　算数科の授業において、習熟度別学習を設定することで、児童が自分で学びの場を選択でき、学びに対する積極性の向上につながった。また、普段の学級とは違う友達と関わる機会にもなり、他者と進んで関わろうとする姿勢も身に付いてきている。
・　思考力を要するチャレンジ問題を設定することで、好奇心を持ちながら学習することができている。複数のメンバーが同じ問題に取り組むことで切磋琢磨し、チャレンジ精神も高まってきている。
・　国語科の話すこと・聞くことの単元では、自分の主張の説得力を高めるためにデータや他者の意見を引用することを通して、学びに対する積極性が高まってきている。また、学級活動における話合い活動では、折り合いをつけて話合いを収束させていく経験を繰り返す中で、思考の柔軟性を高めている。
・　スピーチのメモや原稿をグループの中でアドバイスし合う時には、友達からのアドバイスを記録することで、自らの考えを多様な視点から見つめ直せるようになってきている。

【11　２年次の研究構想】

（目指す子ども像）
・　自己調整をしながらよりよい自分を目指し努力できる児童

（評価指標）
・　自分の考えた道筋を他の人の視点からも考えて、見つめ直すことができる。
・　分からない問題に出合ったとき、調べたり、さらに深く考えたりすることができる。
・　課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめることができる。
・　目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えることができる。

（取組）
・　キャリア教育、自己調整力（学習意欲・学習方略・メタ認知）、個別最適な学びと協働的な学びについての理論研修
・　学びのパスポートの分析・活用
・　授業研究（児童の学び・学び方の変容の見取り）
・　授業改革（ICT活用による個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実）
・　教科での学びの発信（異学年交流・保幼小連携・小小連携・小中連携など）
・　特別活動における異年齢交流（身近なモデルとの交流）
・　社会科・理科・生活科・総合的な学習の時間におけるまとめ（レポート）の充実
・　キャリアパスポートと学びのパスポートの連動
・　自己調整に係る項目の発達段階別目指す姿の具体化と共有（教職員と児童）

（自己調整についての整理）
国立教育政策研究所（2020）
「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関わる参考資料　小学校社会」
◎主体的に学習に取り組む態度
　主体的に学習に取り組む態度については、知識及び技能や、思考力、判断力、表現力等を身に付けることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、粘り強い取組を行う中で自らの学習を調整しようとする側面について、「主体的に取り組む態度」として評価規準を作成する。

学習状況をとらえるため場面としては、以下の２点が例示されている。
① 学習問題の追及・解決に向けて見通しを持とうとしている場面
② 問題解決に向けて、自らの学習状況を確認したり、さらに調べたいことを考えようとしたりする場面
→ 主体的に学習に取り組む態度を評価するためには、子どもが自らの学習を調整しようとする姿を見取ることが大切である。

横田富信(2024)
「子どもの自己調整スキルを磨く 個別最適な学びと協働的な学びを根底から支える」
◎自己調整学習の段階
① 予見段階…学習の目標や計画を立てる段階
② 遂行段階…問題(課題)解決に向けて自身が持つ知識やスキルを活用して取り組む段階
③ 自己内省段階…自己評価を行う段階

◎自己調整学習のサイクルを支える要素
① 動機づけ
② 学習方略(認知)
③ メタ認知
→ 主体的な学習者を育むためには、各教科・領域において、自己調整を働かせる必要のある授業づくり、単元づくりを行っていくことが肝要である。また、教員がその背景にある理論を理解しておかなければ効果的な指導にはならない。

友田 真(2024)
「自ら学びをコントロールする力を育む自己調整学習 子どものやる気に火をつけ、可能性を伸ばせ！」
◎自己調整する力の発達
① 観察段階…教師や友人など、優れた学習者の手本(モデルを観察する段階)
② 模倣段階…観察段階で見たお手本を真似しようとする段階
③ 自己制御段階…他者から教わったスキルを、自分で使えるようになる段階
④ 自己調整段階…環境に合わせて学習スキルを応用できる段階
→ 自己調整する力を高めるためには、学び方についての明示的な指導が必要になってくる。しかし、いつまでも教師が自身のコントロールできる範囲だけで学習を完結させていては、子どもたちが自己調整段階までたどり着くことができないため、発達段階を見極めた支援を行うことが大切になる。

◎子どもたちが学びやすい環境を選択
(例)算数科
〇何で学ぶか
・ プリントで学ぶ。
・ 授業で取り組んだ問題に再度取り組む。
・ PCを使いドリル問題に取り組む。
・ ドリルで問題に取り組む。
・ 友達と問題を出し合って解く。
・ ノートに学習のポイントをまとめる。
・ PCを使ってスライドにポイントをまとめる。
〇どこで学ぶか
・ 自席で学ぶ。
・ 机を移動して学ぶ。
・ 隣の空き教室に移動して学ぶ。
・ 廊下の隅の図書コーナーで学ぶ。
・ 床に座って学ぶ。
・ 立ったまま学ぶ。
〇誰と学ぶか
・ １人で学ぶ。
・ ペアで学ぶ。
・ 複数で学ぶ。
→ 学習方法を選択させるだけではなく、その学習方法が合っていたのかを児童自身が振り返り、次につなげていくことが必要である。教師にとって教えやすい環境づくりではなく、子どもにとって学びやすい環境づくりを意識していきたい。